

筑波大学名誉教授の会会報

第1号

1996年11月発行
〈題字：中村仲夫〉

目次

会長の辞	菅野 三郎	2
偶然必然 - 会報 (創刊号) によせて -	江崎玲於奈	2
大学の近況	古賀 達蔵	3
陸上競技部大活躍	西藤 宏司	4
会員だより	辰野 千壽	4
	高野 文彦	4
会務報告		5



会長の辞

会長挨拶

副会長 菅野 三郎



日毎に秋も深まり木々の緑も一雨ごとに色ずいて参りましたが、会員の皆様には如何お過ごしでしょうか。

さて、筑波大学名誉教授の会の会員数も年々増加し、現在318名（名誉教授総数327名中）に及んでおります。本会の目的は会員相互の親睦を図るとともに筑波大学の発展に寄与することです。これらの目的を達成するために会報の発行、講演会の開催、会員の慶弔、その他本会の目的を達成するために必要な事業を行っております。

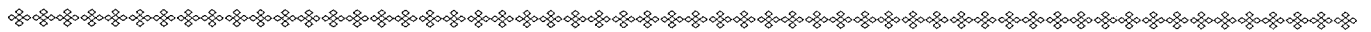
本会は会長とこれを補佐する副会長（2名）および各学群（旧所属学群）から選出された21名の役員によって運営されております。なお、役員の中から庶務、会計、会報を担当する幹事がそれぞれの会務を担当しております。さらに会務の事務的な処理は大学会館内の「筑波大学名誉教授の会」係（現在松田由雄係長）が担当されております。

昨年度の総会において決まりました本会の会報も漸く創刊号の発行をみましましたことは誠にご同慶のいたりであります。この会報を通じて総会の概況や会員の動向、会務などについての諸情報を会員各位にお知らせ申し上げたいと思っております。

会員の慶事などに就きましては会長より祝電を差し上げ、弔事に際しましては本会からご遺族のご意向によって生花または花輪を差し上げており、また、ご遺族の希望に応じて弔辞を述べさせて頂くことになっております。

以上本会の概要を申し述べましたが、会員各位のご協力により本会の一層の発展を切望する次第であります。

本来ならこのご挨拶は小西会長から申し上げますが、病後のご静養中ですので代って私から述べさせて頂く次第であります。



偶然必然 - 会報（創刊号）によせて -

学長 江崎 玲於奈



「この世界にあるものすべて、偶然と必然が生んだ果実である。」これはギリシャキッテの偉大な自然哲学者、デモクリトスの言ですが、この線に沿って、われわれの人生の出来ごとを考察してみるのも意義があるのではないのでしょうか。

私は1947年大学を卒業し、すぐ神戸工業という企業に就職しましたが、1997年でそれ以来、丁度50年になります。その中、ほぼ5年間になる筑波大学を含めて18年間は日本、そして32年間はアメリカで仕事をしました。50年の中、45年間は主として半導体の研究、最近の5年間は教育を研究しているということになるでしょう。

私は大学卒業後、研究生活丁度10年目、1957年にソニー在職中、エサキダイオードを生み出しました。この業績は高く評価され1959年、理学博士、1973年、ノーベル物理学賞を戴きました。

さて、エサキダイオードを誕生させたこと、そしてノーベル物理学賞まで戴いたこと、この出来ごと、果して、“偶然であったろうか、必然であったろうか？”の問いを發してみましよう。もう少し正確には、偶然と必然の割合はどうかと言うことですが、ローマの政治家で作家でもあったペトロニウスが“偶然といえども原因がある”などと言っているように、何を偶然とし、何を必然とするか、の決め方も考えねばなりません。

簡単に考えれば、偶然には未知、必然には既知、従って前者は結果が予想出来ないので計画することも不可能ですが、後者は反対に、結果の予想、計画が可能でしょう。

ところで、私は高校時代から自然の驚異に感動し、科学の研究者になろうと決意しましたが、研究は未知への

挑戦であるというところに興味を覚えたに違いありません。科学研究には、勝負の世界という程ではないにしても、射幸性、偶然性があり、夢が大きく広がっていますが、その反面、自然科学は極めて客観的、論理的、累積的な学問で方法論も確立されていることは申すまでもありません。一般的に物理学の諸法則は決定論的であり、必然性が裏付けられています。

エサキダイオードの功績は、半導体中で量子力学的トンネル効果の存在をはじめて明確にしたことですが、量子力学の基礎は、すでに1920年代に立派に出来上がっています。従って、このダイオードの研究も細かい計画のもとに行ったことは言うまでもありません。そして実験上のさまざまな困難を乗り越え、予想通り量子力学が教えるトンネル電流を観測することが出来ました。ここまでは必然の結果と言えるでしょう。しかし、これだけではノーベル賞は無理だったと思われまます。

ところが、トンネル電流の中に大へん際立った負性抵抗が現れました。これは誰もが予想出来なかった発見で偶然のなせる業だと言えるでしょう。幸い、この新現象の理論づけは明解にすることが出来ました。この人の意表をつく負性トンネル特性の発見、この偶然性がエサキダイオードを一躍有名にしたのです。

このように考えますと、サイエンスの研究業績においては必然より偶然が高く評価されることは明らかで、エサキダイオードも例外ではありません。ノーベル物理学賞を受賞したのもこの偶然性の賜物ですから、このダイオードに関して、偶然と必然の割合を敢えて個人の意見として言うならば10対1位ではないでしょうか。

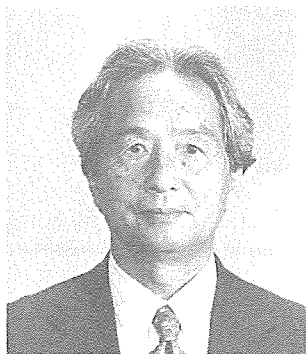
筑波大学名誉教授の方々、それぞれ立派な業績を挙げられたことと存じますが、偶然と必然の割合いは如何でしょうか。

さて、皆さん方には筑波大学の発展に多大の貢献をして戴きこの場を借りて深く感謝の意を表します。今後共、わが大学の将来について、よろしくご指導くださることをお願い申し上げ、ご挨拶に代えたいと存じます。



大学の近況

副学長（総務担当） 古賀 達蔵



今年度になってからの新しい出来事を、思いつくままにいくつか紹介させていただきます。つくば地区の施設について申しますと、ループ通りの北端一帯で、ループ通りの内側には、第二・三学群棟周辺に、バイオシステム研究科棟、国際政治経済研究科棟、理工学研究科のベンチャー・ビジネス・ラボラトリー棟、ループ通りの外側には、先端学際領域研究センター棟等の新しい建屋が目立ちます。

経営・政策科学研究科は、大塚地区の夜間修士課程の上に新たに後期3年博士課程を組み込んだ形で、博士課程の研究科となりました。このいわゆる夜間博士課程の誕生は、本学が開学以来堅持してきた修士課程と博士課程の並立制に変化をもたらす画期的な出来事で、社会人を対象にした高度な職業人教育を求める社会の要請に応えた大学院の多様化の一環と位置付けられます。体育研究科には、「JFK・Jリーグプロフェッショナルスポーツ・コーチ論」寄付講座が誕生しました。プロ・スポーツの高度な専門指導者養成を目的として、日本サッカー協会と日本プロサッカーリーグからの申し入れによるものです。

学群・学類関連の話題としては、短期留学制度による外国人留学生の受け入れが今年の試行を経ていよいよ本格化し始めました。大学院生、研究者等を含めて本学が受け入れた外国人に対する住居の確保等、国際化に伴う問題に直面しています。一般学生の受け入れに関しては、恒例となっている高校生に対する筑波大学説明会を2日間に分けて開催するなどして、優秀な学生の確保に努めています。明年度の入試では、合格発表を受験番号のみで氏名は公表しないことになりました。昨年度のが就職状況は、前年度より幾分改善されているようです。就職先は、企業：公務員：教員がほぼ8：1：1の割合です。大学院進学者は、卒業生の34%になっています。

陸上競技部大活躍

部長 西藤 宏司



第65回日本インカレで女子が7連勝（8回目の優勝）、男子は準優勝。茗溪会、紫峰会、体育会の御支援の賜と厚く御礼申し上げます。

女子の日本インカレ総合7連勝は日本学生陸上競技界では連勝タイ記録であり、また本学では女子バレーボール部の6連勝を更新した。一方、男子は第二日目の110mHの富田（優勝、体4）、谷川（2位、院1）等の活躍により、優勝校日本大学に10点リード。特に富田は日本学生新記録13秒89を樹立、優勝へのムードを高めた。しかし、最終的に2.5点差の僅差で苦杯をなめた。走高跳の伊藤（体4）、三段跳では杉林（体3）の優勝等の活躍で跳躍選手は大活躍。また樋口（体4）は十種競技に優勝。今年度の活躍は、出場選手だけでなくトレーナー、データバンクチーム等の選手以外の活動や心の通った応援と一丸となった団結によるものであった。

明年にも強力な戦力が多数残っているので、来年こそは「アベック優勝」を実現すべく努力するつもりである。ご期待及び応援よろしくお願いたします。

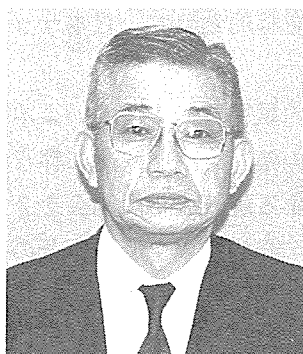


写真提供 陸上競技社

会員だより

近況報告

辰野 千壽



私は、昭和48年10月、筑波大学創設とともに副学長としてお世話になり、その後、昭和53年10月新構想の教員養成大学として創設された上越教育大学の学長として大学の創設に当たり、平成元年3月に退官いたしました。筑波大学で初代の学長をされた三輪知雄先生、ともに副学長をされた大島清、福田信之、榊原仸の諸先生もすでに故人となりました。今日、教育改革の一環として再び大学の改革が問題になっていますが、大学創設の当時を思い、関係者のお骨折の程をお察しする次第です。

現在、(財)応用教育研究所所長、(財)学校教育研究所理事長等を勤め、民間の立場で教育研究の仕事に従事していますが、何かにつけ筑波大学の関係者のご支援を頂き感謝しているところです。なお、第16期学術会議会員として「新しい学術研究の動向」（パラダイムの転換）についての調査にも参加し、元気にやっています。

近況報告

高野 文彦



早いもので、筑波を去ってからもう7年、年令も70の坂を越えてしまいました。それでも結構忙しがっていて、その意味では元気といえるかもしれません。先週も、入試改善の日中共同研究（科研費）で、北京と成都へ行って来ました。研究会と観光でかなり忙しい旅でしたが、峨嵋山頂に泊って日の出を見たり、印象深い旅でした。北京と四川省という都会と地方の両方を見て、中国の近代化というものなかなか大変な事業だと感じました。

そろそろ身辺整理をする時期かとも思っているのですが、留学生を週3回教えていることもあって、なかなかその気分になれません。まあできるだけ長生きをして、生きている間は人生を楽しみたいと思っています。

会計報告

筑波大学名誉教授の会 平成7年度会計報告（案）（7.4.1～8.3.31）

収入の部		支出の部	
1. 前年度繰越金	50,876円	1. 会議費	28,840円
2. 預金利子	1,497	2. 電報費（6件）	35,778
3. 会費	735,620	3. 供花等料（4件）	65,114
4. 懇親会残金	17,500		
<hr/>		<hr/>	
合 計	805,493円	合 計	129,732円

有価証券保有状況（平成6年度末）

1. 定額貯金 1,811,000円

〔備 考〕

収入の部

1. 会費は、平成6年度新名誉教授者から入会者46名（57名中）、平成7年度新名誉教授者からの入会者23名（26名中）及び未加入名誉教授者からの入会者5名（7名中）の計74名分です。

支出の部

1. 会議費は、役員会（2回開催）における会場費等です。
2. 電報料は、町田 貞，上田清基，真田順平，市村俊英，馬淵和夫，三宅和夫の各先生の叙勲に対する祝電です。
3. 供花料等は、岩崎洋治，佐藤弓葛，森田紀一，山中 勇の各先生に対する香典または生花代及び弔電です。

編集後記

本年3月の役員会で会報の発行を依頼され、いずれその内にと考えていたら、9月の役員会を迎え、十二月初めに総会の予定とのこと。第1号は、総会の案内とともに会員に送るという段取りにしておりましたので大いにあわてました。それから、印刷所、執筆者の依頼など二人で手分けして仕事を進めました。「会長の辞」は、小西会長が病後静養中ということでしたので、とくにお願いして、菅野副会長に代って書いて戴きました。また大学からは、江崎学長はじめ、古賀、西藤両氏にも玉稿を頂戴して、どうやら恰好がつかしました。また題字は芸術学系の中村氏が、立派な題字を書いて下さったので、本会にふさわしい会報になりました。次号は一層充実したものにしたいと存じます。なお、会員便りは二百字程度で奮って御寄稿をお願いします。送り先は大学会館です。本号の発行に際して大学会館の松田係長にいろいろとお世話になりました。併せて感謝いたします。

会報係 大木昭一郎
鈴木 博雄